

頻度を表す副詞の性質

— トキドキとトキオリ —

八尾由子

1 はじめに

頻度を表す副詞トキドキとトキオリとは、複数の辞書において相互に解説に用いられていたり、『分類語彙表増補改訂版』(2004)でも同一グループに分類されていたりする¹。しかし両者の用例を観察すると、その現われ方がかなり異なっていることがわかる。もっとも明らかな違いは用いられる文体である。トキオリが話し言葉では用いられにくいのに対して、トキドキには文体上の制限はほとんど見られない。また、頻度の高低という点で比較すると、トキオリはトキドキに比べ、頻度がやや低い印象を与える²。しかし両者は文体の違いや頻度の高低だけでなく、それを用いて表される事態の性質も異なっている。文中のトキオリをトキドキに換えることはほとんどの場合可能だが、その逆は必ずしも可能ではない。

本稿の目的は、事態の時間的限定性、そして話し手が当該事態をどのようにとらえているか、この二つの角度からトキドキとトキオリとの相違点を明らかにすることである。

2 時間的限定性から見た相違点

時間的限定性とは、ある事態が時間軸上の一点に縛られた事態か、それとも恒常的な事態なのかという角度から事態をとらえる概念である。工藤(2002)によると、前者は時間的限定性のある「現象」、後者は時間的限定性のない「本質」である。現象のうち、動的展開のある事態を「運動」と呼ぶ。運動は主に動詞述語で表される。現象のうち動的展開のない事態は「状態」である。一方、恒常的な事態のうち、ひとつの特徴をとらえて表すのが「特性」であり、その特性の複合体が「質」である³。質は「ボチは秋田犬だ」のように時間が流れても変化し得ない事態である。

¹ 同じ分類中に「久し振り」「久々」「時に」「時として」「往々にして」「折に触れて」「時たま」などが含まれている。

² 仁田(2002)でもトキオリは「どちらかといえば、中頻度に属するものの、その頻度性は高くなく、低頻度に近い存在であろう」と述べている。

³ 「状態」と「特性」との間に「存在」という分類が設けられている。存在は時間的限定性のある場合(「あそこにへびがいる」とない場合(「この山にはへびがいる」と)がある。

工藤 (2002) は、これらの事態の間に移行がありうることも述べている。まず述語が動詞ル形の場合、個別主体の特性を表す場合がある。例えば「あの子はよく泣く」は「泣き虫だ」という特性となりうるのである。「子供はよく泣く」のように一般主体になると事態は現実に現われた具体的な事態ではありえず、主体の特性を表すことになる。運動は「一回的運動」から同一の時空間における繰り返しである「多回的運動」、異なる時空間における不規則な繰り返しである「反復的運動」、規則的繰り返しである「習慣的運動」を経て時間限定性が奪われ、恒常的な特性へと移行する。

頻度を表す副詞を用いて表された事態は一回性の運動ではありえず、主に異なる時空間において不規則に繰り返されるものである⁴。これは「反復的運動」である。ところが上述した移行の過程「反復的運動→習慣的運動→特性」のうち、習慣的運動にはなりえない。頻度を表す副詞は「三日に一度」や「東京へ行くたびに」のように規則的に生起する事態とは相容れないのである。頻度を表す副詞は程度性を持つという性質によって習慣的運動を経ることなく特性へとつながる。

この章では、トキドキ、トキオリを用いた事態が反復的運動のみを表すのか、それとも他の事態への移行が進んでいるのかを観察し、両者の違いを確認したい。

2.1 トキドキ

トキドキの用例では、主体は具体的な個別主体であることが多い。

- (1) 時々学校で彼に会い、その度に私はふとうつむいてしまった。(久坂葉子『灰色の記憶』)
- (2) 僕の大好きな若い女の先生の仰ることなんかは耳に這入りは這入ってもなんのこともだかちっともわかりませんでした。先生も時々不思議そうに僕の方を見ているようでした。(有島武郎『一房の葡萄』)
- (3) 枝に残った枯葉が若芽にせきたてられて、時々かささと地に落ちた。(有島武郎『カインの末裔』)
- (4) 「うちの親分—いえ、大畑のことですが、どうも時々変わったことをやるんですよ。しかし今度のは桁外れですね」(赤川次郎『女社長に乾杯!』)
- (5) 酒も亦牧野さんの人生の一設計で、彼は「飲み助でなければならなかつた」けれども、飲み仲間では誰よりも酒に弱く、酒が時々きらひですらあつた。(坂口安吾『牧野さんの死』)
- (6) 「あなたは可愛い女の子ね。時どきうるさいけれども」(サガン『悲しみよ、こんにちは』)

⁴ 頻度を表す副詞の中にも、同一の時空間、あるいは時間は異なるが同一空間における繰り返しを表すものもある。同一時間における繰り返しは一見ありえないようにも感じられるが、例えば「しきりにドアを叩いた」のように連続した複数の動作が一つの事態を構成するような場合には同一の時間における繰り返し、すなわち多回的運動と考えられる。

(1) は異なる時空間、(2) は同一空間という違いはあるが、ともに反復的運動である。(3) も具体的な個別主体による反復的運動といえる。(4) のように述語が動詞ル形をとると、事態は現実に現われた個別的なだけでなく潜在的な事態となる。つまり時間的限定性が失われ、特性に近づくのである。

(5) (6) は形容詞述語である。トキドキはほとんどの場合動詞述語をとり、形容詞述語をとる例はわずかである。(5) の「酒がきらい」は動的展開のない現象、すなわち「状態」であり、トキドキによって、その状態が発話時までには繰り返し確認されたことを表している。⁵ (6) は「うるさい」という状態が繰り返し確認されるのであるが、タ形ではなく「うるさい」の形をとることで(5) に比べて事態が潜在化していると考えられる。個別主体であっても述語に動詞ル形あるいは形容詞非過去形が用いられると時間的限定性が失われる方向に進み、特性に近づいているといえよう。

次に、主体が特定されない例をあげる。

(7) 材料をなべに入れ、ときどきかき混ぜながら弱火で煮詰める。(作例)

(8) 天竜川は黒かった。闇に鎖ざされて黒いのである。時々パツパツと白い物が見えた。岩にぶつかる浪の穂だ。(国枝史郎『鶯湖仙人』)

(7) は料理の手順を述べる文であり、現実世界に動作主体を求めるとすれば料理をする個人であろう。(8) は現実世界においても動作主体は存在しない。「白いものが見える」という事例が複数回起こったことを表している。いずれも動的展開のある事態が不規則に繰り返されること、すなわち反復的運動である。

ある特徴を持ったグループが主体となっている例も見られる。このような主体は、具体的な個別主体ではなく一般化された主体である。実例中の述語もル形やコトガアルなどの形をとって事態が潜在化している例が多く、動詞タ形の例はほとんどみられない。

(9) 何組のなにがしというヤクザでもない青白いインテリに、時々こういう教祖めいたヤサ男がいるものであるが、悪事の型がきまっているヤクザとちがって、こういう奴らは何をしているか分からない。(坂口安吾『街はふるさと』)

(10) 「意志の人は、徹頭徹尾自らを信ずる。時には神すらも信ぜぬ。だから時々過ちをする。(阿川弘之『山本五十六』)

⁵ 述語に動的展開がある場合には、頻度を表す副詞によってその事態が繰り返し生起することを表すが、形容詞述語など動的展開がない場合には、話し手あるいは文中の主体がある状態を繰り返し確認したことを表す。

(9)は「存在」を表すが、存在の中でも時間的限定性のない事態である。文末のイルモノデアルによって、個別の事態ではなく一般的なケースを述べている。(10)では動詞はル形を取っており、「意志の人」の特性を表している。

トキドキは、わずかであるが一般主体をとる例もある。

(11) 犬や猫はこれをちゃんと心得ているようである。そうしてたいのけがや病は自然の力で直してしまう。人間はわずかの知恵に思い上がって天然をばかにして時々無理なことをする。そうして失わなくても済むのに二つとない生命を失う場合が多いように思われる。(寺田寅彦『鎖骨』)

一般主体をとる場合には、事態は具体的、個別的なものではありえない。(11)では人間の特性を表している。

以上のことから、トキドキを用いて表された事態について、時間的限定性の点から次のようなことがいえる。

トキドキを用いた文は、主に個別主体の反復的運動を表す。主体が特定されない場合は、ある主体による動作の繰り返しか、あるいは事例が複数見られることである。これらも時間的限定性を持った事態である。個別主体で述語が動詞ル形を取った場合、事態は潜在化し、時間的限定性を失って特性に近づく。形容詞述語の場合、その状態が複数回確認されたことを表し、非過去形(～イ)をとると時間的限定性は失われて特性に近づく。一般主体やある特徴を持ったグループが主体となった場合には時間的限定性のない存在や特性を表す。

2.2 トキオリ

トキオリも頻度を表す他の多くの副詞と同様、反復的運動を表す。

まず個別主体の例をあげる。(13)は動詞ル形を取っており、(12)のような例に比べ、事態は潜在化している。しかしいずれも反復的運動である。トキオリが形容詞述語をとる例はほとんど見られない⁶。

(12) ただ鮎太は時折、自分が他の青年たちと異なっていることを感じた。(井上靖『あすなる物語』)

(13) 皆は「玉枝はん」とよび、よくなついた。玉枝もまた愛想よく村人たちにふるまった。時折、

⁶ 「褒めるばかりでなく厳しい態度も時折必要だ」のように形容詞述語を用いた例を作ることができるが、この場合の「必要だ」は「必要になる」の意であり、動的展開を持つ事態である。

駄菓子や餅などを茶うけに作業場へはこんでくる。(水上勉『越前竹人形』)

次に主体が特定されない例をあげる。このような場合、見える、聞こえるなどの述語をとる例がよく見られる。(14)はその例である。(15)は存在を表す。深い穴の存在を話し手が繰り返し確認したのである。いずれも、時間的限定性のある事態である。

(14) 沼地の廻りの樹木が風になびいている音が聞こえ、階下で談笑している山小屋の夫婦の声が途切れ途切れに伝わってきました。ときおり、ガラス窓に何かのぶつかる固い音が聞こえました。
(宮本輝『錦繡』)

(15) ときおり深い穴が地面にぽっかりと口を開けていることもあった。穴の位置は地図の上に赤いフェルト・ペンでしるしがつけられていたので、そのあたりに近づくと我々はいくらかスピードを落とし、ライトで地面を確かめながら前進した。(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)

ある特徴を持ったグループが主体になっている例も少数ながら見られた。(16) (17) はいずれもすでに具体化した事態であり、時間的限定性のある事態である。

(16) だから展示会に行く記者は新入社員や若手が多かったが、時おり編集長クラスのベテランが出かけることもあった。(椎名誠『新橋烏森口青春篇』)⁷

(17) 教会の鐘が鳴り、時折出征する者を送る旗の列が駅に向うことはあっても、それも町の静けさをかき乱すものではなかった。(吉村昭『戦艦武蔵』)

一般主体をとる例はほとんど見られなかった⁸。名詞述語や形容詞述語もほとんど現れない。一般主体を用いた例(11)をトキオりに換えることは可能だが、そのような実例は見当たらなかった。また、トキドキが名詞述語、形容詞述語をとっている例(5)(6)にトキオリを用いると不適切になる。

(5) 酒も亦牧野さんの人生の一設計で、彼は「飲み助でなければならなかつた」けれども、飲み仲

⁷ 「編集長クラスのベテランは時おり展示会に出かけるものだ。」のように、主体をハでうける、述語をルモノダの形にする、などによって事態は潜在化し、事態生起の時間は抽象化されて特性に近づくと考えられる。このような作例は不可能ではないが、実例中には見られなかった。

⁸ 次のように個別主体か一般主体かの判断が難しい例も見られた。

(18) が、歌舞伎はときおり描写に沈湎することがあり、その墮落した形式においては、そこに役者の第一義的目標が置かれることも間々起ったのであります。(福田恒存訳『ハムレット』シェイクスピア劇の演出)

間では誰よりも酒に弱く、酒が時々（*トキオリ）きらひですらあつた。（坂口安吾『牧野さんの死』）

- (6) 「あなたは可愛い女の子ね。時どき（*トキオリ）うるさいけれども」（サガン『悲しみよ、こんにちは』）

以上のことから、基本的にトキオリは時間的限定性のない事態に用いられることがないと思われる。トキドキが個別主体でも述語が動詞ル形や形容詞を取った場合特性に近づいたり、一般主体やある特徴を持ったグループが主体となった場合には時間的限定性のない事態を表すなど、反復的運動から特性を表す方向に用法が広がっているのに対して、トキオリの用法はそれほど広がっておらず、反復的運動にとどまっているようである。

3 話し手による事態のとらえ方

3.1 観察・確認と一般化

2では、事態の時間的限定性の点からトキドキとトキオリとの違いを述べた。事態の時間的限定性は、話し手が当該事態をどのようにとらえているかとも関連している。

時間的限定性が失われ、反復的運動にとどまらず特性を表そうとする場合、話し手は複数の事例を観察し、それらをもとにして事態を一般化するという過程が必要である。したがって、トキドキが時間的限定性のない存在や特性を表す場合、話し手はその事態を「観察を経て一般化された事態」であるととらえていることになる。これに対して、反復的運動を表す場合には複数の事例を観察してはいるが一般化は行われておらず、話し手が「観察を経た描写」であるととらえていることを表す。

また、トキドキには話し手が確認していない事態、つまり発話時にはまだ具体的に現実となっていない事態に用いられる場合もある。

- (19) 「時々、遊びにいらしてよ。遊びにきてらしてたら、記代子さんにも会えたのよ。はやく、行方見つけてあげてね。そして、記代子さんを幸福にしてあげて」（坂口安吾『街はふるさと』）
- (20) すると桂子は、「そんなに来るたんびにお金なんかいらないうわよう」といった。彼女も、勤めを継続しながら、私に時々、逢う積りでいたのだ。（田中英光『野狐』）
- (21) 時々ここに来れば、誰か話し相手がいるから、退屈はしないだろう。（作例）

つまり、トキドキは、話し手による事態のとらえ方という点から言うと、時間的限定性のない事態を表す場合には「観察を経て一般化された事態」であるととらえており、反復的運動を表す場合には「観察を経た描写」ととらえている。しかし依頼や願望など、観察や確認が行われていない事態にも用い

ることができる。非常に使用範囲の広い副詞であるといえよう。

一方トキオリは時間的限定性のない事態には用いられにくく、反復的運動を表す場合がほとんどであった。したがって、話し手は当該事態を「一般化した事態」とはとらえていないことになる。また、(19)～(21)のように発話時に具体的になっていない、観察や確認が不可能な事態にトキオリを用いると不適當、あるいは不自然になる。トキオリにとって、話し手による観察は不可欠な要素である。

(19') * 「トキオリ、遊びにいらしてよ。遊びにきてらしてたら、記代子さんにも会えたのよ。はやく、行方、見つけてあげてね。そして、記代子さんを幸福にしてあげて」(坂口安吾『街はふるさと』)

(20') ??すると桂子は、「そんなに来るたんびにお金なんかいらわないわよう」といった。彼女も、勤めを継続しながら、私にトキオリ、逢う積りでいたのだ。(田中英光『野狐』)

(21') ?? トキオリここに来れば、誰か話し相手がいるから、退屈はしないだろう。(作例)

トキオリが表すものは「観察を経ているが一般化されていない事態」つまり「観察を経た描写」である。前述のようにトキドキは観察の有無、一般化の有無という点では制限が少なく、広い範囲で用いられるのに対して、トキオリが使用できるのはかなり限られた事態であることがわかる。それでは、トキドキとトキオリとがいずれも用いられうる場合、すなわち「観察を経た描写」の場合には、両者にはどのような違いが見られるのだろうか。

3.2 偶然性、非意図性

トキオリには、「観察を経た描写」であるほかに、話し手のとらえ方においてはもう一つ特徴的な点がある。

本稿の冒頭でも触れたが、トキオリの用例においては、ほとんどの場合トキドキに置き換えることができる。しかし、その逆は必ずしも成り立たない。以下の例(22)～(25)はトキドキをトキオリに換えると不適切あるいは不自然になる例である。

(22) そこで財界の方は池田成彬、郷誠之助の二人を仲介にして意見を聞く催しをやり、知識人の方は各分野三十五、六名の学者たちに時々(??トキオリ)集まってもらって、意見の交換をし、海軍が何を考え、どんな事に困り、国民からどんな支援を求めているかということを知ってもらうようにしようというのが最初の意図であったようである。(阿川弘之『山本五十六』)

(23) 我々の汗や垢が例の酸っぱい水といっしょになって、朝に晩に流れ込んでいるのだから、時々(??トキオリ)汲み出さなければ溢れるほど溜ってしまう。(夏目漱石『溝韓とところどころ』)

- (24) 清が頭を冷やしているうち、宗助はやはり精いっぱい肩を抑えていた。時々（*トキオリ）少しはいいかと聞いても、御米は微かに苦しいと答えるだけであった。（夏目漱石『門』）
- (25) 時々（??トキオリ）裏返えして見て、仕上って行く絵の調子を眺め、次の仕事を考える必要もあります、あまり度々裏返して見てばかりいると、勢や気合いが抜けて絵が大変いじけてしまうものであります、ある程度までは、度胸や胆力が必要です。（小出楯重『楯重雑筆』）

これらの用例に共通するのは、トキドキで修飾される述語が、何らかの具体的な目的のために意志あるいは意図を持って行う動作行為であることである。(22) は話し手自らが行動するだけでなく他者への働きかけという積極的な行動であり、海軍の問題に関する意見交換という明確な目的を持った行動である。(23) は手間のかかる労働をわざわざ行う場合であり、(24) は話し手が病人を気遣って容態をたずねる場合である。このような場合にトキオリでは不適當である。(25) は絵の制作の手順であり、「裏返して見る」のは次の仕事を考えるためにすべき行為である。

逆に、人間の意図や意志が入り込む余地のない事態、例えば自然現象を表す文にはトキオリを用いた例が少なくない⁹。

- (26) かなた、叡山の片ほとりから暗い夜空にかけて、時折稲妻がひらめいた。（三島由紀夫『金閣寺』）
- (27) ときおりすき間から粉雪が入りこむ以外には、たいした支障はなかった。（新田次郎『孤高の人』）

ところで、動作主体が何らかの目的のために意志を持って行う行為であっても、トキオリを用いることによって、それが初めから意図され予定されていた計画的な行為でなく、動作主体の気の向いたときあるいは機会があった場合に行うという非意図的、偶然的なニュアンスが生まれる。以下の例でトキドキと比較されたい。

- (28) 笠原は時々（トキオリ）古本屋から「新青年」を買ってきて、私に読めと云う。（小林多喜二『党生活者』）
- (29) 私は時折（トキドキ）日本の女流作家の随筆など拾いよみした。（久坂葉子『灰色の記憶』）
- (30) ポローニアス 狂気とはいえ、ちゃんと筋がとおっておるわい。ええ、ハムレット様、外気はお体に障ります。おはいりになっては？
ハムレット 自分の墓穴にな。

⁹ 天気は自然現象のひとつであるが、天気予報に用いられる「晴れ時々曇り」のようなトキドキの用法は、専門用語として一定の定義をもって使用されているものであり、ここでは一般の文とは区別して考える。また、この用法から生まれたと思われる「名詞トキドキ名詞」の形も特殊なものとして今回の考察からは除外した。

ポーニアス なるほど、妙案、そこならたしかに外気は防げる。ときおり (??トキドキ) みごとな返答、さっきからやられてばかりおるわい! (シェイクスピア 福田恒存訳『ハムレット』)

(28) ではトキオリを用いると、笠原の行為が「私」にとっては規則性のない、思いがけないタイミングで生起することを表す。(29) は「拾いよみ」の持つ、何気なく気ままに行うといったニュアンスとトキオリの非意図性とは関連している。(30) は、トキオリをトキドキに換えることができない数少ない例である。ここでは、トキドキを用いると話し手の感じた驚き、意外さを十分に表すことができなくなり、この文脈においては不自然になるのである。

前出の (22) ~ (25) でトキオリが不自然あるいは不適切であった理由は、この「気ままに行う、偶然起こる」というニュアンスと、事態の内容とが矛盾するからと考えられる。(22) は海軍に関わる意見交換のために財界人や知識人を招集するのであり、気ままに行うべきことではない。(23) (25) も都合の悪い事態が起こるのを防ぐために必要な行為である。(24) は話し手が病人を気遣いつつ言葉をかけたのであり、気の向くまま言葉を発したのではない。

次の (31) は命令の形で親しい者への依頼を表しているが、頻度そのものではなく、相手の条件が許すか何らかの機会があったときに知らせてほしいという意味である。トキドキを用いるとこのニュアンスはなくなって頻度そのものに重点が置かれることになる。

(31) 大阪の様子も時折 (トキドキ) ^ら報せてくれ。(井上靖『あすなろ物語』)

以上のことから、トキオリをトキドキと区別する重要な性質として、話し手が当該事態を「非意図的で意外な偶然の事態」ととらえている点が指摘できよう。

話し手にとって偶然性、意外性が感じられる事態とは、頻度の高低から言えば低い頻度で生起するものであろう。高頻度で起こる事態と偶然性、意外性とは矛盾するはずである。冒頭で述べたようにトキオリがトキドキと類義語として扱われていながら「トキドキに比べて低い頻度を表す印象を与える」ことは、話し手が当該事態を意外で偶然性を持ったものとしてとらえ、差し出すことと関連があるのではなかろうか。

4 まとめと今後の課題

以上、トキドキとトキオリを用いた文が時間的限定性の点から見てどのような性質の事態を表すのか、そして話し手が当該事態をどのようなものとしてとらえているのか、この二つの点から両者の共通点と相違点を観察してきた。

本稿で述べてきたトキドキ、トキオリの相違点を、ここでもう一度まとめてみると、次の表のようになる。

	トキドキ	トキオリ
時間的限定性	主に反復的運動。 一般主体、述語が動詞ル形などの場合、時間的限定性を失う。	反復的運動。 時間的限定性のある事態に用いる。
話し手による事態のとらえ方	反復的運動の場合「観察を経た描写」 特性の場合「観察を経て一般化された事態」 観察不能の事態にも用いる。	「観察を経た描写」
	意図・偶然性の有無に関わらない	非意図的で意外性・偶然性のある事態

トキドキは、頻度の高低から言うと、ショツチュウやタビタビほど高くなく、またタマニ、マレニといった副詞ほど低頻度でもない、その両者の間を埋める存在であろうと思われる。この非高頻度・非低頻度の領域¹⁰において、本稿で取りあげた「時間的限定性」「話し手による事態のとらえ方」という二つの点、そして文体の面から見ても制限がほとんどなく、広い範囲で用いられるのがトキドキである。

一方、トキオリの使用には制限が強い。時間的限定性のない事態にはほとんど用いられないこと、話し手による一般化には至らず、観察による描写のみを表すことなど使用範囲はかなり限られている。上図からも見て取れるとおり、トキオリの用法はトキドキの用法の範囲にほとんどおさまってしまう。このように単に「トキドキの一部」であるかのように見えるトキオリを、積極的に特徴づけているのは、話し手が事態を非意図的で偶然性を持った事態としてとらえているという性質である。(28)～(30)で確認したとおり、このニュアンスはトキドキでは表すことができない。

このことから、トキオリの性質・示差的な特徴を把握しようとする場合、冒頭で述べた「話し言葉に現われにくい」という文体上の特徴のほかに、話し手による事態のとらえ方が重要であるといえるだろう。

本稿の考察を経て、頻度を表す副詞の特徴を把握するためには、事態の時間的限定性と、話し手が

¹⁰ 仁田 (2002) では、トキドキは中頻度を表す副詞に分類されている。

当該事態をどのようにとらえているか、この二つが有効であることが確認された。今後はこれらの視点から、頻度を表す個々の副詞の特徴を把握し、頻度を表す副詞全体の体系を明らかにすることが課題であると考えられる。

〈参考文献〉

- 久米稔 (1968) 「頻度をあらわす副詞の意味の測定」『早稲田大学語学教育研究所紀要』 7
- 久米稔 (1971) 「頻度をあらわす副詞の意味の測定 (Ⅱ) —— 一对比較法による同意語群の検討 ——」
『早稲田大学語学教育研究所紀要』 10
- 矢澤真人 (1986) 「反復の連用修飾成分 —— 「動詞句の素性と反復表現の構文論的考察」試論 ——」『学習院女子短期大学国語国文論集』 第15号
- 矢澤真人 (1987) 「頻度と連続 —— 連用修飾成分の被修飾単位について ——」『学習院女子短期大学紀要』 25
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店
- 国立国語研究所 (1991) 『日本語教育指導参考書19副詞の意味と用法』 大蔵省印刷局
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト —— 現代日本語の時間の表現』 ひつじ書房
- 喜屋武正勝 (2002) 「人称の不特定性をめぐって —— 主語なし文のばあい ——」『教育国語』 4 — 4
教育科学研究会・国語部会編
- 工藤真由美 (2002) 「現象と本質 —— 方言の文法と標準語の文法」『日本語文法』 2 巻 2 号
- 小池清治他 (2002) 『日本語表現・文型事典』 朝倉書店
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』 くろしお出版
- 国立国語研究所 (2004) 『分類語彙表増補改訂版』

〈用例出典〉

青空文庫

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』 (1995) 新潮社